拂はれたのであらうが、藏譯や漢譯等の對校上の檢繫一言にして云へば總じてテキストロジカルな攻究により多くの力を盡されたかつた。漢譯者の明に指示した極めて見易き點などの見落しから奇異な譯文の生れたことなどは、切角の聖き企てにも副はず誠に遺憾に堪へ得ない。又渡邊氏は其序に於て、佛譯が早き時代に出でたるを以て、英譯に及ばざるやのことを述べて居らるゝが、上來の處々にも一瞥した如く吾人の乏しき經驗の證する處は寧ろ其正反對であることを終に一言しておく。（山口益）

○忍性菩薩良觀年譜補遺

永仁六年の條に左記の事項を加へる。

八日鑒眞和尙東征傳繪緣起五卷を唐招提寺施入した。現に同緣起を唐招提寺に藏し、近くは大日本佛敎全書遊方傳叢書第四に收めるところであるが、該叢書編者の附言によれば「各卷奥書は忍性施入當時のものなりや否尙攷究の餘地あるべしと云ふ」。然し何れにしても、施入の事實は確かに認めねばならぬ。同緣起の畫工は六郎兵衞入道蓮行であるが、詞書の筆者は各卷異つてゐる。但し第二卷には何とも記載がないので明かでないが、第一卷は美作前司宣方、第三卷は大炊助入道見性、第四卷は足利伊豫守後室、第五卷は島田民部大夫行兼の筆に成るといふ。施入者の署名には極樂寺住持沙門忍性となつてゐるが詞書の作者も忍性と考へられる。佛敎全書も忍性の作として居る。忍性がわが國律宗史上の一大先德たる鑒眞の傳を編んだといふことは、尤もなことゝ思はれる。

なほ粗漏な年譜に就いて補正すべきことが少くないであらうから、大方の示敎を仰いで完成を期したいと思ふ。